

檀信徒各位

秋季彼岸法要のご案内

聖名 豪雨や台風、地震に見舞われた夏も終わりを告げ、
秋のお彼岸を迎えます。

皆々様にはご健勝の事とお慶び申し上げます。

秋季彼岸法要を下記のように勤めます。

ご多忙の処とは存じますが、お繰り合わせご参詣下さいます
ようご案内申し上げます。 合 掌

平成23年9月上浣

無量寺 住職 堤 俊翁 拝

記

※期 日 9月23日(金) 秋分の日

※時 間 午後1時より音楽法要・ご回向^{えこう}
午後2時より歌唱指導

※ご回向料

普通回向 1霊 1,000円 以上 ご志納下さい。

※お供え米、お供え米料 随意ご志納下さい。

本尊様のお供え、お花代等にさせていただきます。

※歌唱指導 カーラビンカ指揮者勝田友彰先生

曲 目 宗 歌 (つきかけ)

法然上人800年遠忌記念曲 (いのちの理由)

(ふるさと) 他

歌の練習を会場の皆さんと一緒にして、共に歌いましょう。

釈尊の生涯

正しき教え

ムリガダーヴァにおける釈尊の第一声は「出家者が実践してはならない二つの極端がある。その二つとはなんであるか。一つはもろもろの欲望にひたすら愛着することである。それは下劣であり、いやらしい凡愚の行いであつて、聖にあらず、かつ無益である。一つはみずから苦行をこととすることである。それは、ただ苦しく、聖にあらず、かつ無益である。わたしはこの二つの極端をすてて、中道をさとつた」という、釈尊の根本的立場の表明であつた。さらに続いて「ではなにを中道となすか。それはすなわち八正道である。いわゆる正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、

正定である」と説かれた。釈尊は中道実生活にどのような展開されるべきかを、この八正道をもって示されたのである。八正道は、まずすべてをありのままに知見する、正しい観察（正見）から出発して、次にそれを正しく考え（正思）、それを



発表することばを正しくし、真実を語り（正語）、また行動による表現も正しくし（正業）、身口意の行いが正しくなればおのずから正しい生活（正命）がひらかれてくるのである。これら五つの正道を実現させるべく常に努めはげみ（正精進）、注意をほらい、それを持続するよう心がける（正念）とともに、心の散乱、動揺をさけて心の平静（正定）をたもつ必要がある。これらの中、第一の正見は八正道の根本であり、基本となるものであるから、他の七つの正道の帰結でもある。すべてをありのままに正しく観察するということは縁起にもとづいた見識、見解である。したがって中道とは正しい道であり、それは縁起にもとづいた道なのである。されに、人生の苦しみとそのあり方をさとするのであつた。

このような説法を聞いたカウンディニヤ等の五人の旧友は、心に言い知れぬ喜びを感じ、その教えのあまりにも高く深いことを知って、釈尊の弟子となつた。ここに佛（釈尊）と、法（真理、仏教の教え）と、僧（サンガ、共同体的仏教教団）の三宝が初めて成立するにいたつた。

院号授与式



大施餓鬼法要の折

おひとりが院号を受けられました。

不 断 院 熊丸 義明 殿

おめでとうございます。熊丸さんは平成 16 年に五重相伝を受けられました。その後約 7 年間、法要の折に法話を聞かれて修養を積まれました。これからもご精進くださるよう祈念いたします。

14 日会（念仏と写経の会）

1、日 時 毎月第 3 土曜日但し、8 月はお休み
午後 3 時より勤行とお念仏
(日常勤行式 浄土宗のお勤め)
引き続き 写経会

2、場 所 無量寺 2 階 本堂にて

3、参加費 無 料

写経用紙（和紙）は準備しております。

(実費をお願いします。)

用具は各自お好みのもの

(筆、すずり、墨汁、サインペン等)をご持参ください。

筆ペンを多少準備しております。

納経を希望される方は 納経料 1 巻 1,000 円をご志納下さい。

(納経料は積み立てて、観音様建立の資金といたします。)

法然上人絵伝

第一巻第二段

勢至丸誕生二流の白幡天より降る



第一巻第二段①



時国夫妻のお祈りのかい

あって、崇徳天皇の長承二（一一三三）夫人は何の苦痛もなく、玉のような男子を出産した。その時紫雲が天にたなびき、家の西にある椋の大木に、白幡が二流飛んで来て稍にかかった。幡の飾りについては鈴の音が天に響き、美しい布の刺繍が日に映えて、きらきらと輝いた。ところが七日ほどすると、その美しい幡は天高く昇ってしまった。この木は「両幡の椋の木」と名づけられた。年代がたつて椋の木は倒れてしまつたが、その根元からいつまでもすばらしい香りが立ち込め、不可思議な出来事が続いた。そこでこの地の人々は、この事実を尊び敬って寺院を建立し、誕生寺と名付けた。

その昔、国民の幸せを願つてすばらしい政治を行つた応神天皇が生まれた時、八つの幡が下つた。これは仏教の基本的な教えである八正道を表現したものであるが、法然上人が誕生したときもこれと同じように、二流の白幡が飛ん

で来たと言つて語られている。

法然上人誕生の絵は、「源氏物語絵巻」以来使われている吹抜屋台の描法で、館の内部が立体的に描かれている。上の二枚の絵の下が、産室で前後に八双の屏風が置かれ、その中に二人の女性がかかえられている夫人が妊婦の時国夫人であろう。痛みでうつむきかげんで苦しそうである。絵の中央に大きく尼が描かれているが、時国の母であろうかゆつたりと自信ありげに元気づけ、気配りをしているように見受けられる。

時国らは隣の室で心配そうに座っている。

画面の左には、みごとな庭園が描かれているが、一角に椋の木がある。もともとが二枚の高い木で、そこに二流の白幡がかかっている。白幡は強い風に舞つてたなびき、かすみの上には、紫雲が立ち込めている。

善導寺の供養塔



大本山善導寺に、徳川家康の供養塔があることをご存知でしょうか？元和二（一六一六）年に建立されたこの供養塔は、塔のみが現存していますが、建立当初は家康廟「実相精舎」の内に奉安されたと伝わっています。お江戸から遠くはなれたこの久留米の地に、どうして家康の供養塔があるのでしょいか。今回は少

この供養塔を建立したのは、田中家の二代目当主・忠政です。（田中家は、有馬家の前に筑後を治めていたお家です）初代吉政は、信長・秀吉に仕え、関ヶ原の戦いでは東軍につき尽力しました。の戦

いでは東軍につき尽力しました。戦後その功を賞され、筑後一国の城主として筑後入りをしています。吉政の死後、弟の忠政が家督を継ぎ、妻に徳川秀忠の養女（家康の弟・松平安元の娘）を迎えました。その縁があり、元和二（一六一六）

年四月に徳川家康が死没すると、徳川家の菩提寺である江戸の増上寺と同門の、善導寺の境内に家康廟を建立しました。家康廟建立により、従来一〇〇石であった寺領は四〇〇石を加えられ、五〇〇石となりました。善導寺本堂の屋根頂上には、五つの葵の紋がみられますが、これはこのときの加増によるものと伝えられています。

さてこの供養塔、「源高院殿従一品大相国徳蓮社崇善道和大居士」という銘が刻まれています。「蓮社」号とは、浄土宗の宗脈／戒脈を相伝した人に許される称号で、即ち浄土宗の僧侶を意味しています。徳川氏と浄土宗の関係は古くより始まっており、家康も三河時代から大樹寺（三河伊田野）長老に帰依し、浄土信仰に厚かったと言われており、慶長十五（一六一〇）年、秀忠とともに浄土宗戒を授戒しています。

家康が浄土信仰に厚く、その親族と婚姻関係を結んでいた田中氏が統治する地であったため、善導寺には家康の供養塔が残されているのです。



歴代将軍の位牌を安置し供養している



善導寺本堂の棟には葵の紋が5つ入っている

日常生活の中の仏教語

往生（おうじょう）

「登校の途中、踏切事故で電車が遅れ、往生したよ」

「高速道路は工事中で、沢山の車が立ち往生しています」

「お前も往生際の悪い男だな」

などという会話は、日常しばしば耳にするところである。

ここで使われている「往生」という言葉は、「どうにもしようがなく、困ってほとんど閉口した」という意味である。

しかし、元の意味は全く違う。

読んで字のごとく、これは「往生生まれる」ことである。どこへ往生生まれるのか、というと、仏さまのいらっしゃる仏国（浄土）を志すのである。つまり、仏教を信仰する人が、死んで生まれ変わる世界への旅立ちをいうわけである。浄土宗や浄土真宗でいえば、阿弥陀仏の本願を信じて、彼の仏の国土である西方浄土に往生生まれることである。